

野あざみ

朝の散歩の途中アザミの蕾を見つけた。何故かレンゲや菜の花は少年のころのことを、アザミは青年期の自分のことを思い出させる。少年の私がレンゲ畑や菜の花畑を駆け回り、青年の私がアザミを見ながら将来を夢見たためだろうか。アザミはまた、そのころNHKラジオから流れてきた歌を思い出させる。「高嶺の百合のそれよりも 秘めたる夢をひとすじに くない燃ゆるその姿 あざみに深きわが思い」



「つるつるすべるうどんが歯がゆくて」これは杖塾に来談する一人の青年の作った自由律俳句である。彼は最近、二人の大人の言葉に傷ついていた。「いいかげんに自立しろ」の言葉と、「親に金出させて遊んどるのか、エ身分じゃな」という言葉である。彼は小中学校時代のいじめ後遺症に今もなお苦しんでおり、自立できぬ自分が歯がゆくてならないのだ。だからこの言葉は、彼の自責の念をいっそう強くし、彼を苦しめていた。

精神医学者の木村敏氏は『人と人との間』で次のように述べている。「自分が何者であるかは、自分と相手との人間関係の側から決定されてくる」少年期の私は、父親や担任から、内弁慶・気弱・話下手と言われ、そのように対応された。だから父や教師とのそのような関係によって（私はそれが自分だと思いつい込むようになり）その通りの子どもになったのではないか。しかしそれは実体でなく「作られた私」だったのだ。そう考えると自由律俳句を作る青年もまた、いじめっ子や、弱い子と定義する大人たちとの関係において作られたのだ。

私たちはともすると、善意さえあればどんな言い方をしても自分のアドバイスが伝わると信じているところがある。しかし「いいかげんに自立しろ」の言葉をエネルギーとして自立が促進されるケースは稀で、「いつまでも自立できないお前はダメ人間」と、むしろ否定的に受け止めてしまうケースの方が多いと思われる。

「自立に向けて動き始めても、自分のような者の心をつかろうとしない人の、そういう言葉が後ろから引っ張るのです。悪意がないことは分かっているのですが」と、彼は苦笑いしながらつぶやく。

この話を杖塾の「ステップアップ講座」で話したとき、小学校教員の一人から次のような発言があった。「給食時間に子どもが牛乳をこぼしたとき何と言ってあげるといいかな？ そうか、雑巾のある場所を教えて自分で取りに行かせ、あんた良かったね、こぼしたおかげで雑巾がある場所が分ったねと言ってあげるか」

サンテグジュペリの『星の王子さま』の中で、王子さまが人間のいる場所を三つの花卉を持つ花に尋ねると花はこう答える。「どこで会えるか分かりませんね。風に吹かれて歩きまわります。根がないものだから、たいへん不自由してますよ」と。根のない人間は、他人の眼差しという風に吹かれて有頂天になったり、落ち込んだりして不自由をしている。根のない人間の一人としての私も同様である。だから私はそれを意識している時くらいは、肯定的な言葉で目前の人に対応するようにしている。人のためではない、自分のためである。

私は花を求めて高い山に登ったりもする。しかしアザミのような花が路傍にあることをいつも喜んでいて。アザミは、鮮やかでありながら清楚で、大地に深く根を下ろし、私の心を鎮めてくれる花である。